

### 第三章 脱獄行・つめ落とし作戦

#### 1

北神拘置所は周囲八百メートル、赤煉瓦塀の内部にはさらに仕切りの壁がいくつもある。獄舎は並列型舎房で、雑居房・独居房、それに女区と呼ばれる女性を収容する棟と合わせて八つの建物があった。

正門の脇には看守たちの官舎が三十棟あまりある。通常時なら家族も一緒に住んでいるのだが、今は部分が開いてしまい、一人住みの看守が多かった。

ここだけは木造平家建ての長屋で、古い官舎なので、貧民窟の観を呈していた。南門を入った一部にも官舎が数棟ある。こちらは、二戸建てで看守長(典獄)などの住居があった。

赤煉瓦塀の中にあるコンクリート塀は五メートルほどの高さで、官舎を除いた領域四分の三がこのコンクリート塀によって二分されていた。

正門から見て右半分が雑居房舎の四棟、左半分が独居房に懲罰房である。

尾形玉江は女子房のある独居棟の住人になった。一棟だけが女囚を収容するために用意されている。毛を四枚支給された。板床の上に一枚を敷き、三枚を掛け布団にして眠りに就く。

就寝時間は午後九時三十分である。

毛布から顔だけを出し、あらためて、玉江は独居房を見回す。天井は中二階ほどの高さになっていて、明りどりの窓が一つあった。

金網と格子がはまっている。長方形のその窓は今ほ外

から板が打ちつけてあつたので明りどりの用を果していな  
い。首をめぐらせ、やや斜めうしろのもつこの横窓を見  
やる。外に突き出している部分で出窓形式になっている  
。鉄格子の幅は十センチほど、条網入りの硝子はその向う  
には、はまっていた。今は燈火管制下なので黒いカー  
テンが前面には垂れ下っている。

この窓の上部には換気用の小窓がもつと開いてい  
た。雨が吹き込まぬように、この出窓には上部に外庇ひ  
さしがつけてあつた。二十センチ四方の四角い出窓であ  
つた。もちろん人の通り抜けられる穴ではない。高さはほ  
ぼ二メートル、伸び上つても小窓には手は届かない。

玉江は脱走の方法について考え始めていたのだ。

遠くでこつこつと靴音がした。

やがて、独居房とその外とを距てる扉の鍵が開けられ  
る音がした。耳をまわしていたら、がちやがちやともどかし  
い感じの鍵音がした。

この独居房の鍵を開ける時もやはり鍵を開けるのに時  
間がかかった。中風の気があるのか、旋錠、開錠する時  
に林看守は手が震えるのだ。玉江は林看守のそんな  
習癖をちゃんと識別していた。

玉江は林看守が好色そうな眼で彼女の全身を舐め  
まわしたの思い出した。

きいと軋んだ音がして、独居房棟入口の扉が開かれた  
。こつこつと大儀そうな足音がそれに続く。扉の位置から  
十メートルほどの距離、まず最初に足音は三〇二号室  
の前で止まった。

扉上部のシキテン窓（視察孔）から林看守が中の様  
子を窺った。玉江は少しだけこの男を試してみた。

この寒い獄中では不自然だったが、毛布の裾を払い、  
白い二本の脚を露出させた。ふくらはぎから下の部分だ  
けだったが、一見、寝苦しうに装った。

拘置監の被告人め観察は特に念入りに行なわれな  
ければならない。初犯者が多いから、自殺者や拘禁ノイ  
ローゼなどの症状を示すものもいるからである。

気付かぬふらに玉江は乱れた寝姿のままじつとしていた。おおよそ二分ほどでもシケン窓からの観察は続いた。

誰れも知らぬことだったが、天江は妙なものを肌身につけていた。入所する時、素っ裸にされ、検身されたがうまく持ち込んだ。玉江は、かつての恋人だった葉室勝といふ男の陰毛を束ねたものを「五年近くも肌身につけて持ち歩いてきた。根元は糊で固められており、ちよびと毛筆の先のような形状になっている。

好きな男の体毛の一部は、かつて玉江が男の下半身から一本一本むしり取ったものであった。

湊川署に連行された時、その便所で紙入れから取り出し、玉江はおのれのひそみに指を入れて、この愛の遺形かたみぞ隠した。

今、林看守の眼を意識しながら、玉江は毛束の愛撫の道具で、やさしく股間を撫でさすった。

かつて愛し、今も忘れられない 葉室勝と「いふ男のことを懐かしく思い出す。きまつてこの男のことを考えると玉江は異常興奮した。

林看守に見られながら玉江は秘やかに自慰の行為に耽った。林看守は、玉江の腰のあたりが小さく揺すぶられているのを眼にとめた。投げ出された足裏がきゅららにとしぼみ、内腿のあたりが擦り合わされていた。明らかに行為ではなかった。

玉江も心得ていて、気をもたせるために、控え目には下半身をさらした。数分後、やつと林看守はシケン窓から離れた。

玉江は自分を閉じ込めている一枚の分厚い木製扉に眼をやる。錠前の金具は鋌打ちされていた。

その中心部に鍵穴があった。

上方に小指の指頭ほどの大きさの丸い穴があり、その下の溝部分は縦穴になっていた。一本の鍵があれば……そんな思いでこの鍵穴を見つめた。

簡単な構造のように思えた。

外部から見る限りでは三センチほどの縦穴があるだけ

であった。錠前破りのことを刑務所とばでは「つめ落とし」と言ひ内蔵機構のつめをはねることができれば鍵は開くのだ。独居房を出、もう一つの独居棟出入口の外扉の二つの関所を破れば脱牢は可能であった。

つまり二種類の鍵があればいいのであった。

だが、独居棟を出たとしても外の世界にはあの高い赤煉瓦の外壁が待ち受けている。玉江は到底脱獄は不可能なことのよに思えた。

顔の上に十燭光の明りがあつた。

観察を容易にするためで、一晚中明りが灯つているのが規則である。第一夜は、初犯者はたいてい眠れない。だが玉江は明方までぐっすり眠つた。

夢を見たよな気がしたが、どんな夢だったかは覚えていなかった。

戦時行刑の状況は当然のことながらあらゆる面で不備であつた。まず、刑務官の確保がむずかしく通常時にくらへ、ほぼ半分ほどの人員しか配置されていなかった。

看守の出征による人員減はもちろんのこと、待遇もさほどよくなかつたので、軍需工として転職して行つた者も少ななかつたのである。

この手薄な状況のため、逃走事故・自殺・受刑者同士の殺人・傷害事件が各所で発生した。

かくて『逃走防止対策要綱』があらためて作られ、一年間無事故の刑務所には「鍊克旗」が授与されたりした。もっぱら士氣の高揚に刑務当局はつとめたのだつた。逃走事故の激増は、受刑者を軍需産業の徴用工として採用したために屋外作業の機会が多くなつたからでもあつた。

関東地区の東京船舶部隊、千葉刑務所の千潟作業所、前橋刑務所の石川島分隊。

東海地区の名古屋刑務所の第二造船奉公隊、横浜刑務所の第一少年造船奉公隊、川崎炉材特

設隊、甲府刑務所の鵬翼部隊。

また、新潟刑務所の特設工作部隊、長崎刑務所の長崎造船護国隊などなど、大部分の刑務所、刑務支所が徴用工を送り出していた。

逃走事故と同時に、敵機の来襲により受刑者の中から多くの死傷者が出た。

昭和十八年の夏に発表された逃走事故件数はほぼ半年で四十四件、うち構外作業は逃走三十一件を数えた。

その原因分析を記した文中には、最近ニ於テ土工、造船、造機等ノ構外作業ノ増加ニ基因スルトロ多ク又時局ノ影響ヲ受ケテ優秀ナル看守ノ採用難ヲ来シ或ハ多数練達ノ看守ヲ失ナイタル事モ亦其ノ一因ト認め得ベシ一

とこの間の事情が説明されている。

戦時下行刑のもう一つの特徴は、特別警務班を設置したことであった。逃走事故の予防と捜査を目的に、受刑者の何人かを看守の代用要員として任命したのがこの特別警務班制度である。

看守の質の低下はこの特別警務員の採用によつても明らかであった。

看守長又ハ副看守長ヲ主班トシ看守部長又ハ看守 若干名及ビ最モ信頼スルニ足ル可キ受刑者若干名ヲ以テ組織ス一

その任務は一つは逃走や他の事故を防ぐための密告制度、また日常監視の補助業務とし、他に逃走事故が発生した場合の捜査要員の役目も負った。

二日目、玉江は二〇九号室の女囚に運動場で声を掛けられた。

午前中の三十分間、運動時間は三日に一度ある。私語は厳禁であったが金網を通して話してきた。運動場は独居房の出窓の外、その延長線上にあった。それぞれ金網で仕切られている。

運動場の広さは畳三枚分の広さ、軽い体操ぐらいなら可能だった。玉の隣りの房は空いていた。

その運動場に姿を見せたのは村尾志保と名乗る三十を一つ二つ越したと思われる女だった。

「あんた、殺つたんやてね。ここに居る女はみんなちよついのばかりやわ。ほらいちぼん外れの中年女、あれは芋ドボウの野荒し、亭主は戦死して小さい子供が五人もいる言そたけど、どままでほんまのことやろね。ここへ来た時、なぐられて、こないにお岩さんみたいに青ぶくれの顔になつてて」

二人は出窓の壁にもたれわずかな日溜りに身をさらしていた。冬の空ほどんよりしていたが、雲間が切れ薄陽が洩れていた。

「このところ敵機の来襲はない。」

二度、警戒警報が発令されただけだった。玉江はほんとは女の話が耳障りだった。

外の状況をつぶさに眺め、逃げる時の算段を、それなりに探ってみよと思つていたので。

あの隣りは、亭主が出征中やのに他の男と何回も乳繰り合つたんやと。男は向うの房にいて、毎晩寝る時間にお互いの名前を口の中で唱える約束ができてるんやて。よほど好き合つてるんやろね。二人の仲は裂かれても心は一つ、ああ、あほら」

あとは配給物資の不正受配者に闇物資の購入者、当の村尾志保は、わたしはちよつと手癖が悪いだけや」と言った。いわずもかなのことも付け加えて見せた。行かず後家やもん。好いた惚れたもあらんのだ。この戦争でますます男はんとは、縁がのうなつてしもうたわ」

「この世の中、アレしかあらんのに、不幸なとや」  
初めて、玉江が口を利いた。

「なにっ？アレって？」

村尾志保はちよつと呆れ顔で見返した。

「せうちなんか首くられるんやからな。男はんと死

ぬ思いしてみたいと言つたや」

「……………」

あんた、なにもたよないのんか？」

あんなんもん、ちつともよないぢい………」

ええ男はんを知らんからや」

なんや、担当さんみたいなのと言んやね、あんた」

問い質したら村尾志保は林看守のことをちよつぱり口にした。

あの爺さん、助平なんや。女囚のみんなが、一度は口説かれててな。今夜あたりはあんたの番かも知れんよ」

玉江は話を聞きながら赤煉瓦塀の外を見ていた。

仕切りの運動場の前方は雑草の生えた小運動場になつてゐる。赤煉瓦塀まではここから三十メートルほどの距離であつた。

外壁は内側に向けて角度が付けてありよじ登れない構造になつてゐる。なによ五メートルの高さではとりつくともできない。赤煉瓦塀の下まで辿り着いたとしても、到底、塀を越えることは不可能であつた。

玉江の視線は塀の外の電柱に張り付く。電柱の頭の部分が塀の内部をのぞき込んでいた。

玉江が強い視線を向けたのは、長方形の紙凧が碍子がいし引つ掛かつていたからである。

新聞紙で作られた足は半ば千切れていたが、それでも風に煽られてひらひらしていた。

この年の正月に、どこかの子供が揚げた凧なのだろうか。弱いスフ糸が切れて一人旅をし、紙凧はここまで吹かれて来たのだ。やがてからみついた糸が切れて、また紙凧は自由な一人旅をするのだから。玉江は羨ましい思いでその手製の紙凧を見た。

ピーッピーッ。三十分が経過していた。その時、呼子笛が鳴らされ、女の看守が姿を見せた。

北門隅の望楼から今までは見張られていた。

赤煉瓦塀手前五メートルほど離れた場所にこの哨舎はあつた。人手不足の折柄、この望楼に看守が立

つのは、運動時間だけのことである。

その日の午後、独居房突き当りの洗濯場で週一回の洗濯が許された。下着の差し入れや支給もないから玉江は着た切り雀の身の上だった。モンペの下の下着だけをとり洗った。

みんな同じようなもので国賊扱いの囚人たちのうち差し入れ品を所持しているものの数は少なかった。

洗濯をしたがらも逃げる方法について考えていた。

洗面台があり、その上の棚に歯刷子や洗面具などが置かれている。玉江は逮捕された時腰にしていた日本手拭しか所持していなかった。

歯を磨く道具もなく、朝は指に塩をつけて歯を磨いた。そのときに思い付いたことだったが、歯刷子の柄で合鍵が作れないものかと彼女は考えた。

木の柄だったが、結構、材質の硬いものもある。手に入れるには誰れかのものを盗むか、消耗品として捨てられるのを待つしかなかった。

盗んだとしても騒ぎが大きくなっただけに違いなかった。物資不足の折柄、盗まれた者は黙っていない。捜検されればすぐにでも発見されてしまう。

それでも何とか歯刷子の柄を手に入れてやること玉江はあれこれと思いを巡らす。

とまた、なれなれしく、村尾志保が隣りにやってきてなにかと話しかけてきた。

朝の運動場での話の続きを聞かされる。

林亥之助は出征している息子の嫁と二緒に暮らしていた。官舎ではなく、拘置所近くの差し入れ弁当屋がその住いだった。

元々は弁当屋稼業だったのだが、このご時勢で商売が成り立たなくなつた。看守不足の折柄、拘置所側から頼まれて臨時の刑務官に任命されたのである。

息子の嫁は二十半ばの女で、林看守の話によるとわしを見る眼はあれは男を見る眼や。なんやかやとわしを誘いよる。ほんまにおそろしい女子や」と、いふと



になるのだが、村尾志保はちゃんと林看守のありていを言い当てていた。

話はあへへやで。きつなあの爺さんが言い寄るのや。そいで、嫁さんがな、気色きよし悪いからはねつけるんちやうか。そやろ、悪口ばっか言てるのは、相手にされへんからやで、きつと

この話は玉江にも領けた。どのだれとだれが怪しいとか、いい仲だとか、どこの男に言い寄られているとか、夜になると訪ねてくるとか、みんな口さががない。

この手の話は玉江の周辺にもいくつもあつた。

村尾志保から、林看守の欲求不満ぶりを聞いたことで、なおのこと玉江は肉体を武器にすることに自信を持った。

### 3

その日の夜はこのほか冷え込んだ。

六甲風おろしの強風が吹き荒れていて、獄舎にいてもびゅうびゅうと鳴る風音が耳についた。

林看守が三〇二号室の前に立つた時、玉江は声を掛けた。

担当者、寒くて寒くて、凍え死んでしまいますわ。この寒さなんとかなりませんか？」

あかんな。練炭持ち込むわけにはいかんものな。だれかて今夜は寒い。ま、体操でもしてぬくまるんやな」  
あの、お願いがありますねん。わたしの下着まだ干したまま、そいで……」

昼間洗つた下着がまだ乾いていなかった。洗濯場に干したままになっている。

シキテン窓を通しての二人の会話だった。

ほなわしが持つてきたるちよと待つてや」

玉江は就寝時間なのに壁にもたれていた。立膝し素足をのぞかせていた。頭からすっぽり毛布をかぶっていた。小一時間して、林看守がもつてきた。

「二二号、下はすつぽんぽんか。な、あてかて風邪引くぞえ。乾かしてきてやったからはよはき」

食器差し入れ口からズロースと長袖のメリヤスシャツが投げ入れられた。

あのな、また乾いとらんかったから、わざわざ練炭火鉢で乾かしたんやで」

恩着せがましく林看守が言う。

手にとってみるとまた暖かった。シキテン窓の向うは二つの眼があるのはわかっていた。

わざとらしくゆつくと玉江は下着を身につけた。

林看守の眼には、はじらいを見せた玉江の姿態が見えた。モンペの片足を抜き、ズロースに片足だけ突っ込む。その間、空いたほうの手で尻を押さえた。

玉江はうしろむきになっていた。同じようにしてもう一方の足にズロースをからませた。

今度はちらと白い尻を露出してみせた。

林看守には、玉江の尻の割れ目がはっきり見えた。メリヤスの肌着は、やはりうしろむきのまま身につける。上着を羽織るよほにして肩にかけ、素早く身につけたので林看守の眼には裸の上半身は見えなかった。玉江はちゃんと男心を見抜いていた。

一度には見せてやらない。

ぬいわ。人肌みたいや」

なんでも言い、わしは鬼の看守とはちがうてにな。ほな、おやすみ」

足音が去り、やつと玉江は一人になる。いやらしいことを想像した。練炭火鉢の上で生乾きの下着を乾かしている時の林看守の顔が思い浮かんだ。

尻まわりの大きさの分だけ下ばきは大きい。古いものなのでどことなく締まりがない。

木綿地肌ざわりを楽しみながら林看守はどんな淫らなことを頭に描いたのか。

数日後には、着たきり雀では不便だろうと言い、モンペの古びたのを一着、玉江のために持ってきてくれた。

玉江はどややお気に入りの女になったよふだった。

実のところ、林亥之助は息子の嫁と今、冷戦状態にあつた。一週間交替の昼夜勤務だから半分は二人だけの夜を過ごすさねばならなかつた。女盛りの嫁のことが気になり夜はよく眠れなかつた。

夏などは嫁の寝乱れた姿を期待してそつと二階家の階段を足音忍ばせて上つたりした。

そのくせ、戦地に行っている一人息子に心のどこかで詫びてもいた。自分が嫁に惹かれるのは、嫁にもそれなりの隙があるからだと言ふ勝手な言い訳を用意してゐた。子供もいなかつたので嫁は暇を持て余しているようにも見えた。性を経験した女が一年半も男なしでは生きていけないとも考えた。

嫁が妙にそわそわする時は、きつと抱いて欲しいのだろと思ひ、彼も気もそぞろになつた。

銭湯に行つて肌を磨いてくるとまぶしうで見ていられなくなる。それで一度手を出した。

湯上り女の魅力に我慢がでなくなつた。  
が、ぴしゃりとはねのけられた。

それ以後、用心して嫁は二階部屋で寝る時、ねじ締まりの錠を内側から忘れずに掛けるようになった。

隣り近所の者の評判のほども気になつた。

もはや、二人は男と女の関係になつてゐるにちがいないと尾びれをつけた話が、伝わつた。

嫁はそれを耳にし、つい先日、実家の丹波・篠山に帰ることを申し出た。疎開したいと言つたが、ほんとは、離れて暮らしたいといふのが本音のはずだった。

もちろん、玉江はこんな林看守の家庭の事情は深くは知らなかつた。断片的に村尾志保から話を聞かされていただけである。

ある日、村尾志保が探りを入れてきた。もつたモンペを身につけたら嫌味なことを言われた。

あの爺さん、そのうち嫁のお古持つてきてやると私には

言いつたのよ

三白眼の白眼の部分が吊り上って見えた。

“ぢみみたいに男はんの味がわかつてる女のほうが魅力があるのや”と玉江は面と向って言ってやりたい気がした。少しばかり勝ち誇った気になった。

4

次の日の朝、洗面場でちよつとした騒ぎが持ち上った。流し台の排水孔の破れ目から一匹のどぶねずみが走り出したのだった。他の女たちは立ち疎んだが、一人、玉江だけは動じなかった。

悲鳴もあげない玉江が見込まれて破れ穴を修理することになった。流し台の下には金網でおおわれた排水孔があった。

直径七センチほどの丸い穴で、そこがねずみの通路になっていたのだ。

食事までの短い一時が、応急処置のために用意された時間であった。

女看守から玉江が手渡されたのは、やつと使い古した金網、それに割れ目を塞ぐ粘土であった。

狭い流し台の下にもぐり込む。玉江は作業にかかる前に、粘土の塊りを千切り取っていた。

これで鍵穴の型どりができないかと考えたのだ。

排水孔の受け口の中を指で探った。

歯刷子の柄でも吸い込まれてはいないかと思った。

配水管の底辺部にはもう一枚、粗いゴミを選別するために金網が張ってあった。指の先で金網の破れ目には手を突っ込んだら指先に痛みが走った。

硝子片のようなもので指先を切っていた。

女看守が、なにか詰まってるかもしれないからついでに掃除しておいて」と命じた。

咄嗟に玉江はその尖った小片を指先にたぐり寄せていた。やはり硝子片だった。

得難いものを手に入れた。

硝子片と粘土の塊りを上着の袖口に忍ばせた。

袖口にはゴムが入っていて手首を締め付けていた。

ものを隠すには都合よそできていた。

女看守は彼女の後ろに立っていたから狭い場所にもぐり込んだ修理人の挙動は一切見えていなかった。女看守の足先だけが背後にはあった。

金網を張り終り、粘土でその周囲を固めてから玉江は這い出す。右手の中指の腹の部分がぎつくと切れ血が溢れ出ていた。

「なんや痛いと思ったら手を切つてもいい」

女看守は驚き、応急処置のために、医務室に玉江を伴った。医務室といっても特別の部屋ではない。

独居棟と隣接した看守詰所に救急箱が備えてあった。それで、玉江は凶らずも詰所の内部を見ることができた。

いちばん端が仮眠室、まん中の仕切り部屋が取調べ室兼待機室で、その隣りに便所と洗面室があった。独居棟の外に出れば逃げるチャンスもあると玉江は思いを巡らせた。

薬箱から赤チンを取り出し女看守が傷口に塗った。他に看守はいない。傷をしていたためか、手錠は掛けられていなかった。

この女看守を無抵抗の状態にすれば逃げられると思った。朝も早い時間、いまがいちばん忙しい時間帯である。背後に回ろうと思いい、じつじつと体をわずかに動かす。逃げる思案をした。

高い塀があるのに、どうやって越すのか？

ちらと考えたが先のことほそれ以上は頭にはない。

隙のない眼を一点に注いでいた時、副看守長の男がぬつと入ってきた。強い視線に射疎められる。

「ちゃんと手錠しろ。お前の眼はそれは逃げる時のな」

凶星を指されていた。

袖の中に隠したものを検身されたら絶対に発見されてしまう。

「二〇二号は特別のお客さんや。逃げられでもしたらえらいよかい」

手錠され、すぐに玉江は独房にもとされた。逃走の機会を逸した。

玉江は独房の中ではじめてじつくと硝子の小片を眼にした。牛乳壘の破片で、飲み口部分だったので厚味があつた。尖つた三角片の切口は鋭い。見つからぬように水洗便所の便槽の底に沈めた。

取っ手を自分で引くと永は出る。

当時としては贅沢な設備だつた。もともと貯め桶になつていて、流された汚物は拘置所内に一度集められてそこから外に持ち出される。自分で把手に手を掛けない限り、硝子片は流れ出すことはない。

粘土は二つに分け袖口に入れておく。

本来だと決囚は拘留中に何回かの取調べのために所轄の警察署に身柄を送られたり、公判のために裁判所に送致される。

だが、戦時中のことですべての手続きが遅れていた。

尾形玉江の殺人・放火・死体遺棄の罪についてもまだ一度の呼出しもなかった。

ただ、鍵穴を見て暮らすだけの毎日である。

硝子の小片を手に入れた数日後、玉江はまた一つの幸運に恵まれた。

運動時間に外に出たらいつか眼にした紙凧が、自分の房の換気用外窓に張りついていた。外庇の下部の隙間に危うい恰好で吹き寄せられていたのだ。

二日前に強風が吹いた。

電線に引つかかっていた凧は吹き飛ばされてわずかの距離だけ空中に舞つたといふわけだつた。

房内からはわからなかつたが、運動場に立つた時に発見した。風は今日は微風で紙凧は死んだように張りついていたが、下から風が吹き上げればまたふわりと空中に投げ出されてしまふかも知れなかつた。

また隣の金網越しに村尾志保が話しかけてきた。

いつもは気乗りしないのに、凧の存在に気付かれてはと  
思い自分から話し掛けた。

玉江は凧の竹組み部分が、もしかしたら、鍵を作る素  
材になるのではないかと考えたのだ。

わたしはここで模範囚なのや。みんなのな、まとめ役や  
るよりに言われてるのや」

「えー、まとめ役でなにをするのん？」

囚人は囚人同士、仲よせなあかんやろ。それにわたし  
今度、防空要員にえらばれたのや」

なにい？その防空要員で？」

「つまたBが飛んで来るかも知れんよて、いざといとき  
は、受刑者の中からえらばれた防空要員が、看守と一緒  
になって火を消すわけなのや。空襲警報が出るとちや  
んと外に出してもらえるのや。少しは自由になるわけ」  
ほな、逃げる人かて出るやないの」

あほやな。逃げるわけないからえらばれるんやないの」  
その間も、玉江は時々、横眼で凧の張りついた高窓を  
見やる。三十分の運動時間が終わった。

かちは模範囚になつても外には出してもらえんわ。うち  
は死刑囚やからな」

ちよつと悲しそうに顔をしてみせる。

止んでいた風が、どこからともなく吹き寄せてきた。

やはり凧のことが気になっていた。

鍵穴のかたちを頭に描く。釘一本だつて開けてやると  
玉江は心に期した。今、手元には硝子片と粘土、それ  
に紙凧に使われていた竹の親骨、ひごがあった。高窓に  
張りついた凧は苦心のすえ手に入れた。

なにしろ二メートルの高さ窓の鉄枠にとりつけたが、手  
は届かなかつた。考えあぐねたすえに、防空用にとりつ  
けられた黒いカーテンを外し、房内の水洗便所の便器  
の水に浸してから、窓の鉄棒に固く縛りつけた。

二枚のカーテンを結び、何カ所かの結び目をつけ、そこを足場にして鉄棒をよじ登ったのであった。

全体重をかければ、結び目はずり落ちて行く。

房内の隅から走り寄り、蛙が飛び付く要領で鉄棒を両手でつかみ体重を上半身に預けてから、結節に足をかけた。

あらかじめ、高窓部分に一本の竹を差し込んでおいた。カーテンレールの代りに使われていた丸竹で長さが一メートル半ほどあった。眼に付く限りの素材を利用した。

吹き寄せられていた紙凧を手前に引き寄せるのがまた難事であった。

片腕で高窓部分の鉄棒の一本をつかみ、体重を支えた。カーテンの結節に足はかかっていたが、重さを支えることは無理だった。

残った右手一本で丸竹を操った。

なかなか外に突き出された丸竹は凧を引き寄せてはくれない。助かったのは、凧の糸を竹の先からめることができたからだった。小さな凧だった。

鍵穴の中の構造を知るためにすでに数度、鍵穴の隙間に粘土を押し込み、その可能性を探っていた。

鍵穴の内部は二重構造になっていて、一枚の鉄の爪が手前にあった。その奥が、鍵の共腹をばら部分で、この共腹部分にぴたつと合ったかたちを採取することができれば内部の構造を知ることができのめだ。

この頃の錠前は現在ほど構造は複雑ではない。

飛込錠もシングルの軽便錠といわれるもので、脱走囚の中にも折れ釘一本で開錠するものが多い。

内部はバネ仕掛もなく、ともかく共腹部分の雌雄のかたちで開閉される仕組みになっていた。

手前にある鉄の爪は釘一本で左右に開く。

もともこの鉄の爪があるために粘土の出し入れは邪魔された。それで、細いひごを用い、あらかじめ鍵穴を開けておく。数本のひごは三〇三号室の外廊下にその先端部を突き出していた。



看守はほとんど見回らず、発見されることはまずない。もつと、粘土の中心部に小細工を加えた。押し込む時はいいのだが、引き抜く時に困難がともなつた。鍵穴に指を突つ込むわけにはいかなかったそれで、自分の毛髪を抜き、数本を縫い合わせ糸を作つた。

この細工を思い付いたのは、葉室勝の遺形の陰毛からであつた。淋しい時・玉江はその毛先で唇を愛撫した。くすぐたさの感じは葉室勝のやさしさを思い起こさせた。糊で固めた毛先を見ているうちにふとひらめいた。

食事の時にもそれとなく考えていたことだつた。

四六時中、玉江は逃走手段のことに頭を費やしていったのだ。入所以来、玉蜀黍やもろこしが半分以上も入つたばらばらのめしが木椀に半分支給されていた。

茶碗一杯半だけあとは満州大豆にうすら豆、時には稗が混入された。それで玉江は食事をおいしく食べる方法を自分なりに見つけた。

喫飯！

の号令がかかると混入されたものから先ず口にした。

残つた米麦の中から箸先で麦だけを拾う。最後に米飯が残る。一気にかき込む。

その楽しみの分を残し、細工に用いた。

よく噛んだめし粒で鍵穴に似せた平べったい形状を作り、その中心部に毛髪を埋め込んだ。

その回りにも数本の毛髪を装着する。平べったい鍵型の糊の板に、毛髪が七、八本生えていた。

わずか一・五センチほどのひよたん型の糊の板である。乾いたら強固な蓋のよになつた。

これは粘土の軟らかさを補うもので、玉江は糊板を粘土で固め、ひごで開かれた鉄爪部分にこれを押し込んだ。糊板部分は外廊下側に押し出されている。固さがあるので、手前に引く時、粘土のかたちが崩れないのであつた。

引っぱる時は、毛髪を引く。数本の毛髪は力が分散する事で、粘土にひび割れが、生じない。粘土そのもの

は長時間おけば乾いて来る。

むりやり押し込んだ粘土は五時間もたつと乾いてきて、鍵の内部で外側に一杯に開かれていた。

共腹部分が内側にと押しされ縮小する。

半ば乾いた段階で、鍵穴の周囲に差し込んでおいたひごを抜く。外側部分との附着がこれで防げた。

五時間も気付かれずに、この細工をするには夜間しかなかった。

空襲警報でもない限り、夜の十一時以降、翌朝六時三十分までは、この監舎には看守は出入りしなかった。巡視は規則では夜間に三回行なわれることになっていたが人手不足で実施されてはいなかったのだ。

玉江は数回の失敗ののち、やっと内部構造を知る手立てを得た。共腹部分の三段状のコピーを粘土面に印象させた。鑄型ならこのまま溶鉄を流し込めば一本の鍵を作ることができるのだがそれは不可能だった。それで、玉江は、入手した凧の親骨部分を使って鍵を作ることを考えた。

竹の性質は都合のいいことに折れない特性を持っていた。スライディング・タンブライ錠は弾機部分さえ押すことができれば容易に開錠する。

玉江は鍵を作ることに自信を持った。

なぜ、ここから逃げ出したいのか？尾形玉江の愛人、葉室勝はすでに死んでいたのだが、その菩提をとむらのは自分しかないと彼女は思っていた。

人知れぬ場所にこの世でいちばん好きだった男性は眠っていた。それを知っているのは玉江だけだった。どうせいつかは死刑になるのだ。だったら一つしかない命、葉室勝のそばで永遠の眠りに就きたかった。捕まってもともとそれだけに玉江は大胆になれたのだ。

一本の竹製の鍵を作るには凧の親骨部分は横幅がなかった。髪の毛を握り合わせた糸が役立った。二本分の竹を一つにし、その糸できつく縛った。

押型を採った共腹部分に合わせて、硝子片で竹片

に刻みを入れて行く。

鋭利な刃物ではないからたやすくは削れない。

この日で入所以来十三日が経過していた。

やっと押型に似た形状の一本の竹製の鍵ができたのは、小道具を手に入れてから五日間が過ぎた日のことであつた。

午後五時。もう房内は薄暗くなりかけていた。

夕食は四時半に終つた。これからの就寝時間までたつぷり時間はあつた。そつと鍵の穴に、竹の鍵を差し込む。なんの抵抗もなく、前面の鉄の爪を分け、鍵先はすつと入つた。差し込む深さを測るために、中間部には刻みが入れてある。

共腹部分にぴつと適合するよじしるしがつけてあつた。深く差し込んでも浅く差し込んでも弾機ははねない。玉江は左側にと回す。

かちやと音がすれば成功だつた。が、弾機が軽くはねる前に、竹がしなり、共腹部分と共調しなかつた。

竹の強さの特性であるしなりのために、鍵の先端部に力が加わらないのだった。一本、二本と、玉江は自分の毛髪を引き抜いた。

縋り糸を作つた。

それをつなぎ、三メートルほどの長さの糸にする。その糸を竹の鍵に丹念に巻きつけた。寸分の隙もないよじにきちんと糸はそろえて巻く。

一本の黒い鍵になつていた。

毛髪で補強された鍵は、先端も含めて固い棒状のものになつた。ゆつくりと差し込み、共腹部分の感触を探つてから左にと回す。

玉江の執念が実つた。かちやりと軽い音がした。

急に鍵先が軽くなつていた。

共腹部分の弾機が共調していた。開錠の音はたしかに軽かつたが、完全に回り切つた時の音はびつくりするほど大きな音だつた。

夜間のことで、もし誰れかが起きていればこの鍵音は

耳にしたかも知れない。

この独居棟には七人の女囚が収監されている。開ける時は、ただ夢中で鍵を回したのに、閉める時は臆病になつた。

村尾志保はどう考えても拘置所側のイヌだつた。もしかしたら耳をそばだてて、次の鍵音を聞きとろうとしているかも知れない。

だが、鍵を開けたままにしておくことはできなかった。朝の点呼時には、女看守が二人、開錠して回る。

それでも用心して小一時間は待った。

房内でじつとじていたら夜が明けてくるのがわかつた。冬期のことで東の空は白んでは来なかつたが、高窓から朝明けを知らせる藍色の気色が忍んで来た。

気が付かなかつたが、コンクリート部屋は朝の冷気に凍てつくような寒さになつていた。

手足が冷めたくなつていた。吐く息が白くなつていて。どこかの囚房で誰れかが、その時、咳をした。この寒さに眼が覚めたらしい。それで、玉江は差し入れた鍵を手にしたまま次の機会を待った。こんこんと高い咳音がした。機をのがさず鍵を元通りにもどす。

あらためて自分が作りあげた鍵の絶妙さに心が躍つた。精巧な一本の鍵だつた。

その夜、空襲警報が発令された。

玉江はすでに自房の合鍵を所持していたが、独居棟から外に出るもう一本の鍵は持つていなかった。

同じ要領で外に出るための鍵を用意するのは至難の技だつた。竹材はまだ持つていたが、条件が違ひすぎていた。夜間しか時間はないし、合鍵を開けて出入しても、通用門のあたりは暗くて手探りの作業になつてしまふ。

別の方法を考えるべきだつた。

空襲警報が発令された時、例によつて村尾志保が防空要員として独居房棟から外に出された。

俄かに外では人の声が沸き起り、房内にはスピーー

カーを通して避難の際の注意事項が放送される。

この機をのがさず、玉江は自分の錠を開け、脱出を試みた。偵察するために、外廊下に出てみたのだった。がらんとした外廊下の西側には監房がそれぞれ十五室、右と左に別れて並んでいる。

外廊下に出てはみたものの、そこから外に出ることは不可能だった。

通用門の鉄扉に手をかけてみたが旋錠されていた。玉江は用もないのにうろうろするのを止めた。

一度、三〇三号室にもどり、使い残しの竹材や糸などを持ち出し、外廊下の突き当りにある洗面所下の排水孔にこれらの材料を隠した。

何かの時に持ち出せるし、部屋を捜検された時に発見されたらすべての計画がむだになるので用心のためにも早目に手を打った。

間もなく、空襲警報は解除された。

玉江は自房にもどり、シキテン窓をひごを使ってそつと開けた。楊子ほどの長さのもので上衣の襟元にいつも隠してあった。

もしかしたら……この前の空襲警報の時に気付いた疑問点に今夜ははつきりした答えを出したかった。

通用門の錠を開ける時の林看守の錠の音の回数を聞きとると玉江は扉のそばに寄ったのであった。

村尾志保が独居棟から外に出ていた。

警戒警報が解除されると林看守にもなわかれて村尾志保はもどつて来る。

数分後、警戒警報も解かれ、二人がもどつて来る気配があった。じつと耳を澄ます。

あの、どことなく落着かぬ感じの開錠の音がした。

少しふるえる手で、林看守が通用口の扉を開けた。問題はその次の手続きである。

そのあと、林看守は扉を閉めるのか、閉めないのか。

本当なら来る時と帰る時、それぞれきちんと開閉したら都合四回の鍵音がしなければならぬ。

前回、林看守は帰る時、一度だけしか鍵音をたてなかつた。玉江の疑問はこの一点にあつた。

開錠する音が聞えた。が、その場で旋錠する音は聞えなかつた。少し高声で話しながら、二人が、三〇三号室前の外廊下を通り過ぎた。

念のために、林看守の帰路の動作に注意を注いだ。向い側のいちばん奥の房が村尾志保の居室である。通常どおり送り届け、もどつて来るのには二分とはかからないのに、五分余りが過ぎた。

話し好きの林看守は女一人の部屋に入り込んで、また息子の嫁の悪口でも言っているのだろう。いや、もしかしたら二人はもぞきていて、寸時を惜しんで性の行為に励んでいるのかも知れない。一度、玉江も林看守の夜の訪問を受けことがあつた。

できることなら腰にぶら下げた鍵束を奪つてやろうと隙を窺つた。体を擦りつけて行つたらちゃんと林看守は玉江の体を抱き止めた。  
ええ体してる。こらあはずんでるぞええ」

林看守は玉江の首筋に鼻を近づけて匂いを嗅いだ。そのせ、やはり用心していて、腰にぶら下げた鍵束をわざわざ外し、ズボンのポケットに入れた。

わいも殺されたらやもならん。ええ思ひはしたいけど、襲われんとも限らんぞな。猛獣は飼ひ慣らしてからや。

はは、用心、用心……」

そのせ、胸元から手を入れ、玉江の裸の乳房をつかんだ。

つめたい手だったので玉江はその時、悲鳴をあげた。

林看守と村尾志保はよつしく乳繰り合っているのではないかと思つた時、独居房から林看守が出てきた。独居房の鍵をおろす。

そのまま、すたすたと歩いて通用門の扉の前に立つた。鍵音が一度だけなら、玉江にも逃げるチャンスがある。期待に胸がどきどきした。

開錠の音はせず、旋錠の音だけが玉江の耳には届いた。つまり林着守はこの独居棟に入る時、逃げる心配のない村尾志保に安心してか、扉は開けても閉めないのだった。

前回とこれで二度同じ油断を見せたことになる。

玉江は張り詰めた神経のおかげで、この好機を知ることができたのだった。

翌日、浮き立った顔の玉江に、村尾志保が声を掛けてきた。狭い小運動場での運動時間は人手不足でこれから一週間に一度になると言う。三日に一度だった入浴時間も先週から週一度になった。

燃料不足がここでも深刻になっていたのであった。

あわせて、村尾志保は、殺人犯の女が逃げる気を起さないよう教訓話も口にした。

おとしいな、男の独居房で逃走騒ぎがあつたんやと。よび込みいそ、電灯が消えたから替えてくれいそ。看守が中に入ったらたたき込み強襲に遇うて軽い怪我したそや。すぐ捕まうてしもて、いま、重屏禁むゆい。きん処分でな、窄衣きくいされてんやと。」

なに？そのさびてっ？」

馬皮で作った剣道の防具みたいなものや。それで胴体包まれてな、締め上げられるんやと。えらいきつい懲罰らしいで。法律でも六時間以上続けてやったらいかんそや。その逃げよした男もな、額から脂汗流して、息も絶え絶え、この食糧不足の時代やもん、もぢらよつとで死ぬとやつたんやて。」

逃げたかて、外のほうがいまの時代は暮らにくいのにな。」

玉江はうまくかわす。

それだな。ここ一、二週間うちに逃走防止の特別班が編成されるそや。」

村尾志保の話だと、受刑者の中から成績のいい者を選抜し、夜間の巡警を強化するのだといふ。また、巡警隊は、逃走者追跡時には特別捜査隊の任も

負うと教えられた。

これは、受刑者に戒護の役目を分担させることから一歩すすんで捜査の役目も負わせることになったことを意味していた。

所属受刑者へ 設備内又へ 作業所及び其ノ附近ノ  
捜査ニ限ルコト

受刑者ニハ 武器等ハ 之ヲ携帯セシメザルコト

この制約条項はついていたが、公式通達が出され制度化していたことであった。

この村尾志保からの情報で、玉江の決心はさらに強いものになった。戦時下のことで、逃走事故その他の事故が多発していた。全体的に管理が甘くなっており、北神拘置所でも人手不足で規則どおりの刑務は遂行されていなかった。

本来ならあるべき、居房捜検、検身、携行時の手錠、各通用門の厳重監視体制、収容者の動向監視などがおろそかになっていた。

玉江はただただ敵機の来襲を願った。

混乱に乗じて逃げるしか術はなかったのだ。

それに、逃げるなら今のうちだった。

一日、二日……緊急事態を知らせるサイレンの吹鳴はなかった。

あの、何の役にも立ちそうにない林看守までが翌日、居房捜検のために各房を点検して歩いた。

竹材の残りを処分しておいて助かった。

あさつてになるとな。典獄さん直々に居房捜検や。そいで間違いがあつたらいかんよあてにちよと見回らせせてもらふぞ」

玉江は手製の鍵は襟の内側に縫い込んでおいた。あの硝子片はまだ便槽の底にあつたが、手を深く突っ込まないわからない奥のほうに隠してあつたので、林看守には発見されることはないと思つた。



それでも玉江は用心のためにこの前のように体のほうに林看守の注意を向けさせた。

あのな、うちは男はんがおらんとあかん体なのや」

ぶつそなを言いよるな。そやけどこゝでは、どもならん」

うちはな。猛獣とはち違き。ちよつとかりがついてるだけや」

ほんまにさせるんか。そら、据膳食わぬはなんとやら言うてな。よしや、いまこゝわしが二人だけになる機会つくれたるから待つとれや。ただしそんな時はお前には両手錠やで、わかつともよろ」

やなうちや、両手錠なんて」

あのな、諏訪山動物園の猛獣ものご時勢や。みんな首締めて殺したそや。おまえはどう考えてもこゝでは虎か熊や。させてもらほしも命がけではええ思いはでけんやろが。寝てる猛獣の首にな、マニラロープを二重に巻きつけておいてな、檻の鉄棒の端に固く結んどくと、猛獣が起き上った時には、きゅつと首が締まるんやと。もがけばもがくほど首が締まるわけや。わしの知り合いに飼育係の男がおつて、可哀想にな、その男の話やと、白熊がいちばん苦しんで、絶命するまでに七分もかかつたといふつた」

その時の玉江の眼は異様に光っていた。

菅家吉蔵を殺害した時の状況とそつくりだった。

眼が吊り上っていた。

女でも玉江は腕力はあるほうだった。この男の首を締めてやろつ……と瞬間のこと考えた。

両手をぎゅつと握りしめた。隙を窺った。

おお、こわ、お前の眼は獲物を狙う猛獣の眼になつとるで」と真顔で言った。

あほなと。うちは男はんはんに襲われたいと思つてるのやんか」

口先でこまかす。が、玉江の唇の端は、このとき引き吊っていた。

その夜、空襲警報が発令された。

林看守は引き続きの勤務で夜間もいた。

時刻は九時を少し回った頃であった。

村尾志保がいつものように連れ出された。

そつと遮蔽幕の黒いカーテンを明け窓の外を見る

。大倉山高射砲隊が発するサーチライトが二条、遠くの空で交錯していた。Bugはこの時期、すでに無差別爆撃を開始していた。

記録によると神戸市街には昭和二十年二月には都合十四回来襲、延百八十機が飛来していた。

死者五十名以上、罹災者六千三百余名の数字が残っている。

玉江は、三〇三号室の錠前をはね、いつでも飛び出せるように用意を整えた。看守らは防衛体制を敷くために、各所に分散配置されているはずだった。

三十分後、空襲警報が解除され、続いて警戒警解除された。また、常態には戻っていない。

周囲は手薄な状況にあるはずだった。

玉江は三〇三号室から外廊下に出た。外廊下の明かりは消されていた。闇にまぎれて、すばやく通用門まですすむ。扉のそばに下駄箱があった。

小さなもので完全には体は隠れない。

だが、構内潜伏やりすごしには一時的には役に立つ。この夜は警戒警報が解除になっているのに、一向に村尾志保はもつて来なかった。

いつもより長い。

玉江にはとても長い時間に思われた。

十五分ほどおかれて、やつと一人の足音と村尾志保の高声が聞えてきた。がちやがちやとまた中風の手が震えるのか、不規則な音がした。かちんと乾いた音がし、通用口の鉄扉が外から押される。

「うていねいなと、通用門を入ったところで、名残りを惜しむように二人は正面向きになり抱き合つた。時間のズレた分だけ二人は愉しみの時間を持っていたのかも知れない。」

林看守には扉を開けたあと閉める心の余裕などなかった。

「ええか、今夜のことは誰れにも内緒やで」

村尾志保の耳元に林看守が囁いた。男の手が、女の腰に回り二人は連れ立って歩き始めた。

玉江は四つん這いになりコンクリートの床をそろりそろりとすすむ。また外廊下の明りは灯されていない。後ろを見ると肩を並べた二人が独居房の一つに入るところだった。

また、情事の余韻を愉しむ気らしい。

その隙に、玉江は独居棟の建物からすると抜け出した。中扉は旋錠されていなかった。

通用門を出た二メートル先に、看守詰所があった。この詰所は女子監舎の附属設備である。

夜間は林看守だけになる。

その詰所の前をすり抜ける。

建物の端に立つ。

女子監舎と同じ造りの建物が何棟か行儀よく並んでいるのが見えた。

その逆の側は赤煉瓦塀となる。

そちらの方角には調理場、食糧庫、備品倉庫などの独立棟が並んでいた。

どの建物も夜間は無人となる。

外に飛び出したもののそれからの算段はついでない。

ともかくも無人の領域へと玉江は走った。

建物の陰を伝い、その都度立ち止まっては様子を窺う。視線の向うに五メートルの高さの赤煉塀があった。

見上げるととてつもない高さに思われた。身長の一、四倍はあるのではないかと玉江は怖れに似た気持ちを抱いた。

隣りの調理場の屋根を見た。ボイラー室の屋根から、長さ三メートルほどの煙突が突き立っているのを眼に止める。玉江はとてつもないことを考えた。

あの煙突をし折って、赤煉瓦塀に立てかけることができたらしと本気で考えた。

身の軽い玉江はその可否を考える前に、調理場の屋根に身を翻していた。

煙突にとりつき、何度か手で押してみた。

直径七十センチほどの細い煙突だったので女の力でも何とかなると思ったがむりだった。

わずかに根元が揺らいただけで引き倒すことはかなわなかった。屋根に上って下を見下ろした時、赤いペンキで示された消防器具格納庫が見えた。

あの中には、梯子とホースが納められているはずだった。玉江は逃走具のあり場所を嗅ぎつけた。

だが、格納庫には南京錠が掛けられていた。

鍵さえあれば……ふとその時、看守詰所の光景を玉江は思い出した。

いつか、怪我をして詰所の内部に入った時、控室の壁にいくつかの鍵束が掛けてあったのを眼にした。鍵を奪おうと考えた。

調理場横に積んであった薪の一つを手にした。

ポケットには尖った硝子片も入っていた。

再び、女子監舎の端の看守詰所にもどる。

燈火管制中なので詰所の窓はどれも黒い布で目隠しされていた。隙間から見ると、林看守が練炭火鉢の火を起こしにかかっていた。

風はかなり冷たく、玉江の手足も寒さためにかじかんでいた。赫々あかあかと燃えた炭火の上にまだ火の点かない豆炭がのっていた。

玉江は戸口に回った。中に押し入ろうと考えた。

と、その時、林看守が立ち上り七輪を持ち上げた。豆炭は着火する時一酸化炭素を出すので、外に出しておくことが多い。

玉江は入口のほうに、にじり寄った。

案の定、まず扉が開き、それから少し震える手で七輪を持った林看守が外に外に出てきた。

コンクリートの床の上に座り込み、ちらわでぱたぱたと風を送りこむ。玉江は隙を窺った。

足元を吹き過ぎた風が向きを変えていた。

林看守が七輪の位置を変える。ちょうど、玉江に背を向けた。そつと忍び足で玉江は背後に立つ。

手にした薪を振り上げ、林看守の後頭部に一撃をくれた。きんぐ！ 咽喉笛が絞られるような切迫した声を発した。前に倒れ込む。

その拍子に七輪の上に上体がかぶさり七輪が引っくり返った。豆炭がころころと転がり、火種の炭が風に煽られてぱちぱちと爆ぜた。

林看守は四っん這いになりながら逃げ、立ち上ろうとしてもかいていた。

首から下げている呼子笛を手にとろうとした。

玉江は次の行動に移っていた。

背後からのしかかり素手で林看守の首を締めた。最初の一撃が強烈だったのか抵抗力を失っていた。首に食い込んだ玉江の手指を振りほどこうとし、両手を首のところに持つてきたが、わずかに爪をそただけでやがてぐったり絶命した。

玉江の行動は沈着だった。傍らの防火用水を汲み、七輪の火を消した。無人になった看守詰所に入り、控室にとまっすぐにすすむ。鍵束が壁に掛かっていた。緊急用のしるしなのか、赤い札が格納庫用の鍵にはつけられていた。

再び、玉江は消防器具格納庫に立っていた。

南京錠を外す。格納庫内には、木梯子と消防用ホースが入っていた。木梯子は三メートルほどもあり、ホースもぐるぐる巻きのものであった。

玉江は木梯子を赤煉瓦塀に立てかける。

塀の高さは五メートルはあるからそれだけでは塀

を越せない。それに塀の高さに立つたとしても五メートルから下に飛び降りるのは危険でもあった。

足でもくじけば逃走は不可能になる。

布製の消防ホースをとり出し、まず、木梯子の端を固定させるために、調理場前の水揚げポンプと木梯子をホースで連結した。

木梯子の両端にホースをからませ、しっかりと縛ってから水揚げポンプの両端にホースをからませ、しっかりと縛ってから水揚げポンプの据え付け部にもホースを巻きつけた。足場を固めてから、ホースのもう方の先を肩にかけ木梯子を登った。

ホースはあらかじめ伸ばしておいたから女でもひよいと肩に掛けられるほどの重さしかなかった。

いちばん上まで登ったが塀の高さはまた二メートル以上はあった。木梯子は斜めに掛けられているわけだからその分低くなっている。

玉江は金具の放水口のついたホースを塀の向うに投げた。ホースは優に三十メートルはあったから手繰(たぐり)寄せするのに時間がかかった。

手薄な警備陣だったが、いつ、何時(なんどき)、看守が巡回にやって来るかも知れない。

やつと水揚ポンプに結びつけたもう一方の端が一杯に伸びた。だが、また、木梯子の高さと塀際とは距離がある。格納庫にもどり鳶(とび)道具の一つである長い柄のついた鳶口を持ち出す。

塀の高さに先端が届いた。

鳶のくちばしをした鉄具が塀の端に食い込む。

くちばし部分が外れないように、向こう側に投げたホースで鳶口の首の付け根のあたりを縛った。布製のホースだから、赤煉瓦塀の表面に密着した。

体を持ち上げた拍子に、鳶口が横揺れになり、嘴(くちばし)の先が外れた。玉江は危うい恰好になり、片手で全体重を支えていた。

必死だった。

眼の前に首の部分縛られた鳶口が宙ぶらりんの状態でぶら下がっている。あらん限りの力をふりしぼって塀の高さに挑んだ。

やつと左手も塀の端にかかった。

一気に両腕の力で両体を持ち上げた。

上半身が塀の向う側に出ていた。

塀の上に立っていた。

あとはホースを伝って下に降りただけだった。

塀の上端部にかかっていたホースが玉江の体重のためにびーんと張った。下りは楽だった。するするとすべり降り、地上メートルほどの高さから地上に飛び降りた。土の感触が足裏に伝わっていた。

高々とした塀を見上げる。内側とは塀は角度が逆になっていた。外に立つと赤煉瓦塀はやや内側にと傾斜していた。塀に沿って走った。

あたりはほぼ真つ暗闇だった。

先程まで雲間をかすめるようにして顔を出していた月もいまはすっかり雲間に吞まれている。

途中で走るのを止める。いかにも脱獄囚を思わせる挙動に思えた。何気ないふう装った。

しばらく歩いてから玉江は塀から離れた。

北神拘置所の周囲は十メートル先がもつ民家だった。家と家との小路に紛れ込む。

玉江はまだ未決囚で自弁衣だったので、脱走囚に見られることはない。

たった今、高い塀を越えて来た女には見えなかった。燈火管制下の闇を伝い、尾形玉江は北神拘置所から姿を消した。